

小学校国語科における「社会性と情動の学習(SEL)」の 実践

—対人関係の向上をめざして—

学籍番号 239216

氏 名 藤田清佳

主指導教員 水野治久

副指導教員 瀧野揚三

1. 背景と目的

児童の社会性や対人関係能力の低下は、学校不適応につながる可能性が大きい。実習校である A 小学校においても、友達との関わり方や自分の気持ちの伝え方に課題を抱える児童の姿が見られた。特に、友達に対する不適切な発言、話し合い場面での消極性、友人関係の固定化や孤立などが学級経営上の課題として顕在化していた。2 年生では、友達との関係づくりや感情のコントロールが十分に育っておらず、注意や指摘が対立に発展する場面が多く見られた。一方、4 年生では、発達に伴い対人関係が複雑化し、友達の目を過度に意識することで発言を控えたり、誤解や思い込みによるトラブルが生じたりする様子が確認された。これらの実態から、学年を問わず、基礎的なソーシャルスキルを意図的・計画的に育成する必要性が明らかになった。

こうした背景を踏まえ、本実践では「社会性と情動の学習 (SEL)」の枠組みの中でも、日本で開発された SEL-8S プログラムに着目した。小泉 (2011) は、SEL を「自己の捉え方と他者との関わり方を基礎とした、社会性 (対人関係) に関するスキル、態度、価値観を身につける学習」と定義し、問題行動の予防だけでなく、日常の学習活動を効果的に進めるための基盤として社会的能力が非常に重要であると指摘している。SEL-8S プログラムは、自己・他者理解、自己のコントロール、対人関係などの 8 つの社会的能力を体系的に育成することを目的としており、教科指導との関連づけも可能である。本実践では、国語科「話すこと・聞くこと」単元と SEL-8S プログラムを関連づけた実践を通して児童の対人関係の向上を図ることを目的とした。

2. 方法

2.1 小学校2年生を対象とした実践

2 年生の実践では、学級全体の基礎的なソーシャルスキルの向上を目標に、SEL-8S プログラムと CSS (Classroom Social Skills, 河村, 2007) を組み合わせた介入を行った。対象は 2 年生 1 学級 32 名であり、国語科「そうだんにのってください」(光村図書国語二下) の単元において、話し合い活動を中心に実践を行った。SEL-8S プログラムでは、「自己・他者への気づき、聞く」、「伝える」、「ストレスマネジメント」に関するユニットを選択し、感情理解や

感情の適切な表現方法を学習した。CSS では、「じょうずな話の聞き方」、「ちょうどよい声」を取り上げ、日常的な自己評価を通してスキルの定着を図った。これらの学習を事前に行った上で、国語科の話し合い活動において実際にスキルを活用させる構成とした。効果測定には「よりよい学校生活と友達づくりのためのアンケート hyper-QU (河村, 2006)」を用い、承認得点、被侵害得点、ソーシャルスキル得点について、事前・事後の比較を行った。

2.2 小学校4年生を対象とした実践

4年生の実践では、対人関係の複雑化や発言の消極化といった学級課題を踏まえ、SEL-8S プログラムを中心とした介入を行った。対象は4年生1学級30名で、国語科「クラスみんなで決めるには」(光村図書国語四下)の単元において、クラス全体での話し合い活動を軸に実践を行った。SEL-8S の8つの社会的能力の中から、「関係づくり」、「伝える」、「自己・他者への気づき・聞く」に関するユニットを選択し、話し合いに必要なスキルを事前に学習させた。加えて、CSS の「めざせ聞き方の達人」ワークシートを用いて、毎時間自己評価を行い、スキル向上への意識づけを行った。効果測定には、田中・真井・津田・田中(2011)の、小学生版「社会性と情動」尺度を用い、8つの下位尺度および項目別に事前・事後の比較を行った。

3. 結果と考察

2年生の実践では、ソーシャルスキル得点が有意に上昇し($t(31) = -2.757, p < .05$), 被侵害得点が有意に低下した($t(31) = 2.696, p < .05$)。一方、承認得点については有意な変化は見られなかった。これらの結果から、SEL-8S プログラムを活用した継続的な介入は、低学年児童の基礎的な対人スキルを高め、学級内での不安や被侵害感を軽減する効果があることが示唆された。特に、「聞く」「伝える」といった具体的な行動スキルを繰り返し練習し、教科の学習場で活用させた点が効果につながったと考えられる。

一方、4年生の実践では、「社会性と情動」尺度の下位尺度全体において有意な得点上昇は見られなかった。ただし、項目別分析では「友だちのよいところを見つけることができる」という項目において有意な向上が確認された($t(29) = -2.249, p < .05$)。このことから、他者への気づきに関しては一定の効果があったと考えられるものの、スキルを十分に練習し、生活全般に般化させるまでには至らなかった。4年生では、自己認識の高まりにより、スキルが向上していても厳しく自己を評価する傾向があり、得点に反映されにくかった可能性も考えられる。また、介入期間や練習量の不足、個別支援の不十分さが、課題として明らかになった。

4. 結論と今後の課題

本実践から、SEL-8S プログラムを国語科の「話すこと・聞くこと」単元と関連づけて実施することは、特に低学年において有効であることが示された。一方、中学年以降では、動機づけや達成感を重視した支援、十分な練習機会の確保、個別の援助がより重要であることが示唆された。今後は、学年や発達段階に応じたSELの内容・方法を精査するとともに、教科内にとどまらず、学校生活全体への般化を意識した実践が求められる。また、教師自身の社会的能力やモデリングの重要性を再認識し、継続的な実践研究を行っていく必要がある。